東京ジャーミイ金曜日のホタバ
2011年01月14日

希望

ムスリムの皆様。信頼なるムスリムの皆様。今日は希望について言及したいと思います。アッラーは人間に希望を、預言者を媒介として教えられました。預言者達は、吉報をもたらす者として、そして警告者として遣わされました。天国の吉報を伝え、地獄を警告しました。なぜなら希望と恐れは人の本質にあるものだからです。

預言者アーダムも、希望を見出すことが必要でした。それを見出す為には、意志が見出されることが必要でした。神は預言者アーダムに希望を教えることを望まれ、そのために、あのよく知られているシナリオを構築されたのです。天国を、何も知らないまま消費するのではなく、意識を持ってそれを獲得する人である必要があったからです。結果として彼は介護し、意識を持った形で天国を獲得したのでした。意志の発見が罪によってなされるのであれば、意志を持った罪は、無意識の善行よりも尊いものでしょう。だから木が地面の上にその身を伸ばしたとしても、善行を得ることはできないのです。なぜならそれには意志がないからです。しかし人は、額を床につけるのであれば、その瞬間はアッラーに最も近しい瞬間です。ヒジュラの際、洞窟で、「恐れるな、アブー・バクルよ。アッラーはわれわれと共におられる」と言われた際、預言者ムハンマドの内面世界に存在した希望を私達は知っています。ムスリムには希望を失うといったことは許されないし、そのような選択肢もないのです。このために、絶望は教えへの否定と見なされています。「アッラーの慈悲に絶望してはいけない」とクルアーンは語っているのです。（集団章第53節）

親愛なるムスリムの皆様。信仰の意義の一つが、希望です。なぜなら私達が信じるアッラーに何かできないことがあると信じているのなら、完全にアッラーを信じていることにはならないからです。

アッラーはクルアーンで、ご自身を信仰者と定義されています。アッラーは誰を振興して信者となったのでしょうか？そう、信仰のもう一つの意義は信頼です。アッラーはしもべたちを信頼されているのです。アッラーはある意味、「私はあなた方を信頼している。あなた方も私を信じなさい」と仰せられているのです。そしてまた被造物を創造されていることは、その希望が失われていないことを示すものです。だから、生まれてくる子供は皆、アッラーの、人間への希望を意味しているのです。

恐れと希望は、人そのものにおいてそうであるように、人間の歴史においても揺るがない規律です。どちらか一つだけに傾くことは、個人にとっても集団にとっても禁じられています。クルアーンは次のように仰せられています。「われは人間の間に（種々の運命の）こんな日を交互に授ける。」（イムラーン家章第140節）これはなぜでしょうか？手に入ったものに過度に喜びすぎたり、失ったものを過度に嘆いたりしないためです。

親愛なるムスリムの皆様。アッラーには一つの勘定があり、知識があります。そしてそれは限りのないものです。アッラーは皆を何かで、あるいは互いによって、試されているのです。大切なことは、私達が何によって、あるいは誰によって試されているのかを知ることです。考えてみてください。預言者ムハンマドは、3年間のボイコットの時期に、そしてマディーナ防衛の為に塹壕を掘っている間に、教友達にキスラとカイセリの財宝と言う吉報を与えられました。心が病んでいた一部の人々は「私達はトイレにいくことすらできない、彼が話している内容はなんというものだろうか」と言っていたのでした。1258年にバグダッドがモンゴルによって占領された時にも、「このウンマはもう終わりだろう、このウンマの寿命もここまでだろう。」と言った人々がいました。しかし約200年後には、アッラーは信者にイスタンブールの征服をも許されたのでした。だから、希望を失ってはいけません。かけらではなく、全体を見てください。命すら投げ出すことのあるこの信仰は、それ自体は決して失われず、命を失うことはないでしょう。